

石橋と庭園の建物

識名園は、美しい自然に囲まれた屋外の癒しと娯楽の場所でした。識名園の設計に影響を与えた日本庭園でそうするように、訪問者は移り行く季節の中で植物や花、遠くの山腹を鑑賞しながら地形に沿った起伏のある輪になった道を散歩し、舟に乗り、橋を渡って景色のいい浮島のあずまやで休憩しながらお茶を飲むことができます。中央にある木々が茂る島に続く一番大きなアーチ型の石橋二つは中国風のデザインで、舟が下を通れるようになっています。サンゴ石灰岩で作られた片方の石橋は改まった外観をしており、海岸から運ばれてきた風化した岩で作られたもう片方は素朴な見た目をしています。六角堂が立つ島に続く三番目の石橋にも巧みな加工がほどこされています。この橋はミニチュアと呼べるほど小さく数歩で渡ることができます。

この場所にある二つ目のあずまやである木造の六角堂も、中国の建築様式を模して作られています。深いひさしがついている六角堂は、完全に開いて風を入れることができます。御殿などの建物に見られる赤い琉球瓦とは異なり、この建物には伝統的な中国の黒い瓦を模して真っ黒な屋根瓦が使われています。池から溢れた水を日陰の涼しい谷間に放出する狭い石造りの滝口の下には、かつては八角形の建物がありました。池の端にある石の船架である舟揚場は、遊覧船が発進するところであり、船を使用していないときに保管するための場所でもあります。庭の三つ目のあずまやは、庭の一番高い見晴らし台である勸耕台にあります。この六角形のあずまやは大正時代（1912-1926）にこの場所に建てられました。あずまやが建てられる前の勸耕台には、中国からの使節が訪問の終盤に休憩するための天幕が張られていました。中国の使節は、視界に海が見当たらない沖縄南部の農場、村、丘の広大な景色を見せられ、琉球王国は小さな王国ではないことを思い知らされました。